

鶴見俊輔と民主主義の視点

木村倫幸

Shunsuke TSURUMI and Japanese Social Movement for Democracy

Tsuneyuki KIMURA

一

太平洋戦争後より一貫して日本社会の民主主義を擁護し続けている哲学者、鶴見俊輔は、現在憲法九条に関する議論が問われている只中に、なお現役の思想家として活躍している。鶴見の思想の根源が、「私的な根」、生活と思想との結びつきにあることは周知の事柄であるが、鶴見はこの視点から戦後日本社会に対して、民主主義の意味を問い続けている。

しかしながら問われている側の日本社会では、思想的立場の左右を問わず、民主主義をある意味での「お守りの言葉」として固守し、その意味するところを深化させようとはしない傾向を持ち続けている。それは特に民主主義的立場を標榜する進歩的勢力において過去に顕著に現れたし、現在もなお現れている場合がある。鶴見はこの傾向に対して、絶えず注意を喚起し、民主主義の意味するところを示唆してきた。しかしながらその効果はいま一つというところであろうか。このことは、日本社会がなお民主主義において未成熟な側面を持つていること、このため様々な社会運動が多くの躓きの石を抱えていることを意味している。それ故現時点において、鶴見の言う民主主義の意味するところを再度確認していく必要性がなお残されていると言わざるを得ない。小論はこのための試みであり、鶴見の民主主義の意味するところを明確に把握するために、敢えて時代的に一昔前の対談集①——哲学者久野収との対談——を利用した。ただしこの対談がなされた時代——まだソ連が存在しており、改革（ペレストロイカ）が行われていた時代——と比較して政治的状况は大きく変化しているとはいえ、民主主義を語る本質は変わっておらず、そして何よりも久野収の発言が、鶴見の民主主義論の特徴をよく照らし出しているからである。

二

鶴見は、民主主義を論じる視点として、民主主義をめぐる権力の関係を指摘する。それが「在権民主主義」という問題である。そして鶴見はこの問題を、林達夫の「共産主義的人間」での議論から論じ始める。

「林達夫のテーマは、今新しくできた言葉で言う『在権民主主義』と『在権マルクス主義』の問題だと思う。『在権』、権力をとり、政府をとった後の、権力

の思想になったマルクス主義というのは、権力を転覆しようと運動するマルクス主義とは違うという認識です。これは今、徐々に当たり前になってる。今年（一九八九年）六月、中国・天安門前の事件は、それを明らかにするもので、一共产主義国の総理が、学生運動が国家の威信を失墜させたとして弾圧する。これは一つの国家主義の変形というか、バリエーションにすぎないでしょう。そういう時代が来たという・・・」（三三三）。

「日本の場合、『在権民主主義』という問題があります。（中略）鵜飼信成さんが、『文部省の「民主主義」という国定教科書の立場もそれでしよう。つまり民主主義をめぐる対立というのではなく、もっと前のほうで相手を排斥してしまつて、自分だけで民主主義を独占して出てくるところに問題がある』と言っている。／これは『在権民主主義』の問題なんです。『在権民主主義』と『在権マルクス主義』とが見合う形で出てきている」（四三三）。

ここに鶴見の民主主義を論じる中心点の一つがある。つまり権力が民主主義を主張する場合には同時に、いかなる政治権力でも不可避的に持っている両刃的な側面を視点に入れないといけないという指摘である。このことを久野は、次のように語る。

「久野 そこはもう、日本の場合、ばくも含めてだけれど、やっぱりイデオロギーいかれで、イデオロギーのいい権力はいい政策をする、悪い権力は悪い政策をするという考え方に引きずりこまれている。権力そのものももっている悪魔的構造を、イデオロギーの是非によってくもらせている。／だから親米派の方は、アメリカンデモクラシーは、権力をいかに大きく行使してもソ連とは比較にならない程度の軽微な悪しか生まないという。一方、その逆の立場は、ソ連の場合は、絶対いい権力だから全部いいことをしているとはいかない」（四八）②

鶴見の視点も同様である。

「世界の情勢は自分の立場抜きにみることはできないんで、自分がどこにいるかをみてもの見なきゃいけないでしょう。H・G・ウェルズの『透明人間』みたいに、『ソビエトのここはダメだ。アメリカはここがいい』とか、そんなことばかりやっていてもしようがないでしょう。／その透明人間の立場が、大まかにいえば日本の知識人の立場であつて、その点で左翼もその中に取り込まれているというのが問題なんです」（二〇八）。

ところがこれまでの運動というのは、この点についての自己検証がなく、久野

が言うような枠組みがアプリアリに前提され、とりわけ左翼の側での運動の検証は、往々にして次のようなものになった。この視点は、久野、鶴見ともに強調するところである。

「久野 やはり、基本的には自分の見解についてさえ自分で責任を取らずに、時代や国家や社会や党派にその責任をあずけて自分を納得させる、という習慣があるんですね。（後略）／本人は責任をとっているつもりでも、ある人は学問や党派の名に隠れて、ある人は選択した場合、自由の選択ではなかったから責任がないという立場に隠れる。ある人は初めから自分の行動なり選択は自由抜き、責任抜きで始末している。右翼の側はもちろん、理論的色彩の強い左翼の側でも、見通しや判断を誤らせた理論の不足、間違いや党派の拘束は深く問われずに、自分のつかみ方、従い方が悪かったのだ、理論や党派は悪くなかったのだという弁解になる。こうなると、自分の理論のどこが拙く、どこが正しいかの腑分けができなくなる。そうすると自分の営みを検証する場合、一方の極端は、はなはだ自己破壊的になり、『全部オレがまずかった。オレはつまらない人間なんだ』という懺悔になる。すると政治や運動から完全に背を向け、経済や文化に全力を傾注することになる」（六七～六八）。

ここにはこれまでの運動における総括の仕方が、鋭く指摘されている。一方での権威主義と他方での総懺悔的総括が見事に結びついていることが理解されるであろう。久野は、この点がわが国の社会運動が陥ってきた落とし穴であるとして、「そうではなくて、どこで間違つたのか、機構や党派のどこに責任を負わすのか、その時の勢いのどこに責任を負わすのかとか、それらを具体的にはつきりさせる営みをやった上での自分の責任の問題になるはずでしょう。そうしないと、責任をとる場合、過剰な無限責任を背負いこみ、坊主懺悔になってしまう」（六八）と述べる。

三

このような、枠組をアプリアリな前提として疑わない思考様式は、近代日本社会では国家に対する態度においても明確に現れる。例えば、近代日本を形成していく重要な要素となった明治憲法に対する態度である。

久野の言葉を借りれば、この議論の前提は、「明治憲法は戦後の現在ではあまり

評判がよくありません——そしてそれは当然ですが——、それでも曲りなりにせよ、市民的自由と基本的人権をたとえ大きな制約づきにしても法律で認めた成文憲法は、アジアで最初であった。孫文やリサールをはじめとするアジアの独立運動の志士たちが日本を評価したのは、憲法の日本であって、帝国主義の日本ではなかった。そこを見落としては歴史に対して盲目になってしまふ」(九四)ということになるが、このこと以上に、久野が言う明治憲法の「対他的構造」と「対自的構造」の側面の区別と評価の重要性に留意しなければならない。即ち天皇制が「一方では支配の機構であると同時に、他方では外側に対する団結の心棒でもある」(久野、九五)ということを経緯が、戦後の現行憲法にも続いていることである。換言すれば、現行憲法の象徴天皇制の基底にも、「日本共同体、一民族、一国家、一指導者」という、いつでも排他的日本型ファシズムになる一歩手前の信仰がひそんでいる」(久野、九六)ということであり、この基底の上に戦後の経済成長があったし、日本という背景を背にして、企業も個人も海外に進出してきていることである。

これを受けて鶴見は、日本の戦争に対する反省のなさ、自浄作用の欠落を語る。「日本の場合には、一五年もあんなムチャな戦争をやって、つまり他国民にあれだけひどいことをしたという意味でのひどい戦争、しかも負けるにきまつている戦争を続けていくんだから、損な戦争でもある。それをやって、しかも自浄作用を作ることがなくてアメリカの軍隊に負けた。／敗北の認識そのものも持続していない。これが重大な問題ですね。世界のどこに對してものいうにしても、敗北の認識がなければいまの日本人にとつての世界認識なんて成り立たない。／それはサイボーグ(改造人間)と同じだと思う。非常にヘンなことになると心臓も取っちゃう。そうすると千年も万年も生きられるかもしれないんだ。それは一つの道で、サイボーグのほうが能率的かもしれない。産業世界で勝つかもしれないし、自動車では日本はアメリカをつぶしたんだから偉いことですよ。実力は認めます。／しかし、自浄作用の道はそれとは違う道なんだ、俺はサイボーグ的だという違いの認識がなきゃいけない。俺はサイボーグだ、だからゴキブリだけの天下になってもまだ生きて自動車を次から次につくって地球全体を壊滅させてやるぞ、という悪魔の精神みたいなものがあればちよつとすごいと思うんだけど、それじゃないんだ。そこに自覚の欠如がある。サイボーグは一〇〇点の答案が出せる。そのやり方で能率をあげている。サイボーグ的だという認識がまずない

とあぶない」(二一〇～二一一)。

この鶴見の意見にある自浄作用の欠如は、これまでそれほど顧みられることなく、国家という枠組みが、以前にも増して現在も次第に強化され、われわれを囲んでいる。そしてそのことをわれわれ自身が当然視して、疑問を差し挟まない状況が存在している。しかしながら同時に重要なことは、この国家という枠組みが当然視されている状況が、権力の側のみならず、左翼の側にも浸透しているということである。これについて鶴見は、こう述べる。

「明治国家は、小さい国からどんどん上がっていつて、歴史上の事実として力を増してきたと思うんです。上昇国家というイメージですね。そして敗戦でものすごく転落して、四等国だ五等国だと自嘲的にいつてきたにもかかわらず、カネができてからはその劣等感を拭い去って、またもとの上昇国家の場を持つていうとしてるんです。南京虐殺、ノモンハンを全部消しちゃつてね。／これが困る。国家がどんどん上昇していつて世界がよくなるという考え方に、疑いを差しはさまなくなっている。それは実は左翼も似ているんで、社会主義国家のほうが資本主義国家より上だから、ここで問題が解決されるんだという、エスカレーターみたいにどんどん上がるような歴史観なんです。これが問題だ。『社会主義国家になつたら自由の概念が変わるんだ』という説があつて、その説が大変広く国際的に左翼に迎えられた時期がありますね」(二六七)。

そして国家がいかなる性格のものであるにせよ、この枠組をアブリオリな前提とする思考回路が国民全体に刷り込まれていること、自浄作用の欠如していることが、現実の問題としてどのような危険をもたらすかについて鶴見は、司馬遼太郎のエピソードを語る。

「司馬遼太郎さんの『この国のかたち』という、月刊『文藝春秋』の巻頭論文を集めた本の第一冊が出たんですが、私はとても感心しました。司馬さんは現代に對して単純な感情を持っている。先の戦争中に戦車隊の小隊長で(埼玉県)熊谷にいた。アメリカ軍が東京へ上陸してきたらどうなるか、ということを中隊長に聞いた。難民が東京からどんどんこちらにやってくる。戦車が動かない。どうするのかと聞いたら、『難民を踏みにじって東京へ進軍する』と中隊長がいった。その時、司馬さんは『もうダメだ。終わりだ。人民を敵として踏みにじって何を守るのか』と思った」(二六八)。

このエピソードというには重過ぎる内容が、国家という枠組をアブリオリにし

て思考する結論的情景として付随する。③

四

そして鶴見は、この枠組みの思考が現在もなお強力に続いているとして、その特徴を「手続き」の問題に見る。

「司馬さんはそこまでしかいわない。高度成長以来、似たような図式になっているように私には思えます。私の言葉で言えばどこが似ているかというと、原理原則を考えないで、手続きに埋もれてしまう考え方になっていると思うんです」(二六八―二六九)。

このことの例として鶴見は、戦前の例を取り上げる。それは、上昇国家を目指しつつ、なおまだブレーキのあった一九〇五年までの明治国家とは質的に異なる、近代国家日本である。

「これは、日露戦争以後もそうなんで、どうすれば陸軍大学に行つて少将、中将、大將になれるかという『手続き』の問題があつて、どうすれば日本が負けないうですむかとか、そういうことは考えない。軍人の任務は、そのことを考えることなのに、そういうことを考えなくなっちゃう。軍人は凶器を持っているわけだから、どうすれば暴れ回らないようにできるかという自己統制の問題も落っこっちゃう。凶器を持っている人間の集団が、いったいどうすれば凶器を使わないですむかというのが軍の原理問題でしょう。そのことがわからなくなってしまうから、二・二六事件が起こっても、これに対しても無統制になつていく。ノモンハンでさんざん負けたにもかかわらず、その負けをひた隠しに隠すことに追われる。全部、『手続き』です。つまり少将が中将になりたい、中将が大將になりたいからノモンハンの敗北を国民にかくす。国民は軍の力を信頼して大東亜戦争に入つてゆく。それは『手続き』の問題」(二六九)。

この視点が、敗戦後から現代もなお続いて国家権力の側で強力に作用している、と鶴見は指摘する。

「その状態に、いまは似ている。いまの『手続き』問題は、いい小学校へ入るためにいい幼稚園、いい中学校へ入るために私立のいい小学校、いい高校へ入るために私立のいい中学校、そしていい大学へ入るためにいい高校。そこで終わっちゃうわけで、これは全部『手続き』の問題です。／どのようにしたら学問をや

れるか。弾力性のある人間をつくれるかという『原理』の問題が落ちている。これは『手続き』であつて、社会学の言葉でいえば、『原理』ではない『中間原理』なんです。マンハイムのいうプリンシピア・ミーディアということ。中間原理を『原理』に代行させるということですね。どうしたら代議士になれるかとか、それは親の看板を継ぐのが一番いいとか、そういうのはみんな『手続き』なんです」(二六九―二七〇)。

つまり「手続き」に集中するとは能率に重きを置くということであつて、これが主流となつているのが現代日本社会である。しかしこのことは、「原理」の問題をどこかに置き忘れてしまうということであり、これが戦後もなお大きな流れとなつていることに対して、鶴見は強い危惧の念を抱く。そしてこれに抵抗する姿勢として、自分としてどこに石を置くかを問う。

五

では鶴見にとって、拠つて立つ場所はどこにあるか。

鶴見は、「私は、自分の思想は自分の生活だと思つています。自分の思想、自分の生活が自分を説得することができるかどうか、これが自分の勝負どころでしょう」(八五)と述べ、「結局、ある仕方で自分が流されそうになった時に、自分はどこに石を置くか。それを問い返すこと」(九八)が、その回答であるとする。このことについて鶴見は、久野の意見を引用して、こう語る。

「ここで久野さんは根拠地の運動というものにふれて／『水俣の人々、被害者はもちろんのこと、それにコミットした作家の石牟礼(道子)さんのように』ここが自分の生涯ものだ」と限定して、全力投球する人がいる。正義、人道上、やるべきであるからやらなければならんというのは、正義や人道が負けてしまうと、やっている方も目も当てられぬ敗北になつてしまう。そうじゃなくて、自分の内部にある考え方、生きる力みたいなもので掘り下げていつて、拠点、根拠地に到達するわけだ。(後略)／といった意味のことを指摘している」(七八―七九)。

そして鶴見は、久野が触れた「ラジカル・ソシヤリズム」の問題に関連して個々の人間に関わるラジカリズムを指摘する。

「それから久野さんがさっきいわれた『ラジカル・ソシヤリズム』ですが、『ラ

ジカル』には『急進的』という意味だけじゃなくて『根本的』という意味があるんですね。ラジコに入って弁論のほうでラジコを代表するのはアランなんですが、アランのラジカリズムというのは根本主義です。／個人の中で自分の根に向かつていく。いつもゆつくりと考えていくから、時の流れでフワフワ変わらないんです。時の流れに立って、ある程度、対抗できる自分の根を求めているわけ。根に向かう精神ですね。それがラジコです。／そのことを目的として、かつては共産党とか社会主義の幻想に身をまかせたことはあっても、自分の中の根、社会の中の根、伝統の中の根に向かつてそこからやっていく。だけど社会主義の理想は保つ。こういうタイプがラジコなんですね（一一九～一二〇）。

この視点は、かつての日本の社会主義運動において当然視されていた「概念主義」あるいは「教条主義」——「めいめい一人ひとりの経験はひとまずカッコに入れて、外や上からの教えを小学校の生徒が先生の教え通りに教科書を学ぶように忠実に学んで、よく学んだ頭のいい生徒、頭のいいインテリが社会主義なら社会主義を民衆に講釈する」（久野、一一六）——というパターンから離れている。そしてここにこそ各々の個人が問題を自分の問題として対する姿勢が存在する。

「根に向かつて、という精神なんですね。しかし『これが根つ子だ』というのは危ない。根に向かう精神。根に向かつて降りていくというか、自分の中の根、社会の中の根、日本の伝統の中の根に向かつて繰り返し下がっていった、そこから時代の流れに対していく」（一二二）。

「根に向かう姿勢を保っていけば、一步一步退いていく姿勢とはちよつと違う下がり方がある。根に向かつて下がっていく。それはあり得ると思う。そこでですね、問題は。自分が自分と向き合うということでしょう」（一二二）。

鶴見はこう繰り返し述べることによって、この姿勢の持つ重要性を鮮明にしようとするが、同時にそこには絶対的なもの、アプリアリなものではなく、絶えず自己検証が必要であることも強調する。

六

鶴見の言う「自分の根」という視点からの発想は、社会運動における「まともさの感覚」、「正義の形式」の問題においてその核心に向かう。日本の社会運動で錦の御旗として掲げられてきた「正義」の問題について鶴見は語る。

「そこには、政府も、政府以外の人間も、守らなくちゃいけないまともさの感覚というのがあつた。そのまともさというのは、哲学的な問題としていけば、形式の問題です。日本の政治運動は形式の問題を落としてきた。だから運動が起こると、正義感で、感情にかられてどこまでもゆく。感情でいけば人権蹂躪します。そのことがあらかじめとらえられていない」（一八〇～一八一）。

「久野 ぼくたち日本人は、気質としての正義感の情念は、大いに奨励されて、持っているんだけど、自他両方を貫く正義の形式への感覚というものを習俗にまかせて育てようとしなない。いや、気質の場合でも、岩波書店の吉野源三郎さんが終始実行しようとしていた“敵ながらも、あつぱれ”という敵味方両方に通じる評価気質がないわけですよ。（後略）」

鶴見 まともさの感覚というか正義なんですよ。同じ正義の形式上の原則（これは原則の原則と言つていくらしい抽象的なもの）を違う状況の中で保ち続けるということが重大なので、常に教室の中で『一番』というのは、教室が変わるとその正義もどんどん変わっていくから、あてにはなりません。そこが問題だと思ふ」（一九四）。

ここにわれわれは、枠組を絶対的なものとして進めてきた日本の社会運動に対して、これ自身のあり方を問題にしていって視点を見出すことができる。「正義感だけからはながつづきのする運動はできないという重要な問題があるんですね。そこでは主流の意見以外は排除することになりやすい。人間が人間である限り合意できるところがあるのではないか——それが形式の問題」（一八五）だとする鶴見は、自分の枠組をアプリアリなものとして推進してきたこれまでの運動の更に奥底に、「自分の根」とこれを支えるアプリアリな「正義の形式」（原則の原則、枠組みの枠組み）が理念として存在すること指摘する。鶴見は、この「自分の根」と「正義の形式」から、逆に現実の運動そのものへと接近していくことができるとする。したがってそこには、運動を「原理」から見ることも目ができることも、その目自身を絶えず自己検証していく立場が主張されているのである。

このことについて久野は、「右翼への批判は、理念形式として自己批判にもならなきやいけないうんだけれど、右翼を批判するのは自己批判に照り返らないし、右翼の左翼批判も自己批判に照り返らない。みんな、われのみ正しとして、自己批判を省略して、右翼を批判し、左翼を批判し、リベラルを批判しているわけですね。批判を成立させるワケ、あるいは理念が自他両方に同様に作用するのがわか

っていない。どこもこれも、身びいきだらけ……」(一八七―一八八)と述べるが、これはそのまま鶴見の立場にも当てはまる。

この立場が日本の社会運動に対してどれだけの力或いは効用を持つことができるか、ということについては不明な点が多い。しかしこの立場が少なくとも、正義の感情だけで突っ走る運動に対して、「自分の根」からする「理念」によって、きわめて当たり前の立場からの主張であることは理解できるであろう。日本の社会運動は、今なおこの視点からの議論をすることができていないことを改めて認識する次第である。

鶴見は、この対談の終了後に、次の言葉を記している。

「人権意識の鈍い革新運動家があり得るとともに、敏感な人権意識をもつ保守主義者もあり得る。このことを認めることが、大正期の東大新人会以来の日本の進歩思想には薄い。革新から保守へのなだれの中で、人権意識の薄い保守主義が優勢を占めることへの抵抗がつづくことを望み、そのような抵抗をつづける仲間のひとりでありたい」(二二三)。

「九条の会」にもつながる鶴見の確信である。

以上小論は、鶴見の民主主義の意味するところに焦点をあわせ、それが「自分の根」と「正義の形式」、「理念としての正義」であることを描き出した。これが現実に具体的な議論として語られることが少ないという事実が日本の社会運動の性格を象徴的に照らし出している。今後の展開に待つところである。

註

① 久野収・鶴見俊輔『思想の折り返し点で』、一九九八年、朝日新聞社。以下本書からの引用は、ページ数のみを記す。

② これに続いて久野は、ソ連派の主張について権力奪取とその後の建設の区別についても触れるが、この意見は現在もお有効である。

「もつともよく自身は、(中略)革命運動とポスト革命の建設運動の断絶に目ざめていることの必要性を言っています。建設は革命の直接継続などと革命のヘゲモニーを握った連中は言うが、そうではない。建設は広い意味での近代化だから、彼らの言う革命的近代化は実は不可能なほどむずかしいのではないか。だから近代化は革命ではないのだということに目ざめていなければならないと

言っています」(四八)。

③ 司馬の文学作品の背景にはこのような視点が厳然として存在していることについて、鶴見は、「この時の国家の指導体制に対する不信の感情。それが四五年間ずっと司馬さんのライトモチーフになっている。自分は日露戦争の終わりで筆をとどめる。日露戦争の終わりから違う日本になった、という考え方ですね」(二六八)と語り、久野も、「日露戦争の勝利で、日本国家は自浄の制度や能力を意に介さずに、向上、的墮落を始めたんです」(同)と賛意を示す。

